

7 五十里洪水の予言

伝承地：馬場通り1丁目

参考書籍：10・18～20



(上河内村羽黒山)

江戸時代の天和3年(1683)、地震による山地崩壊のため、男鹿川がせき止められて、五十里湖ができた。五十里とは、江戸から五十里離れたところにあるという意味である。

享保8年(1722)8月の豪雨のため湖の水位は上昇し、せき止めていた湖水が一気に溪谷を走り、大洪水となり下流の沿岸村々の被害は目もあてられないほどであった。

この話は、この洪水を予言した、信心深いおばあさんにかかわるものである。

二荒大明神を深く信仰していた大工町の小倉屋のおばあさんは、ひと月も前の夢の中で、大洪水があることを知りました。その夢の内容は一二荒山神社の拝殿で神主たちが集まって相談をしていると、本殿の奥の方から、神の声がし「この付近は、8月8日に大洪水に見舞われ、多くの氏子たちは、命を落とすことになろう。お前たちは、どう考えるか。」というものでありました。そこで、長老の神主が、「五十里方面からの大洪水を羽黒山のふもとの大銀杏を倒し、少倉川の川筋に大木を横たえ、水の流れを散らせれば被害は少なくなると思われれます。」と答え羽黒山の神と相談するために、社前の木馬に乗ると、木馬はたちまち白馬に変わり、空高く飛び去りました。しばらくすると、羽黒山の神をともなって戻り、羽黒山の神木の大銀杏を切ることを二荒大明神に申しのべている一というものでした。

小倉屋のおばあさんは驚いて隣近所の人たちに大洪水が起こるとふれまわりましたが、だれ1人として信じてくれません。やむをえず、ただ1人、大明神の功德にすがって被害を最少限度にとどめるため、一心に祈りました。

享保8年8月7日から降り続いた大雨は、五十里湖の堤を崩し、宇都宮方面に向かって流れ出しました。その時、羽黒山のふもとの大銀杏が、流れをさえぎるかのように横に倒れました。また二荒大明神の杉の老木は大銀杏を支えるために、羽黒山に向かって飛んでいきました。こうして宇都宮は大洪水から救われました。

このことがあってから、宇都宮及び付近の人々は、小倉屋のおばあさんの言葉が思い出され、いよいよ二荒大明神を尊敬するようになりました。

なお、杉の老木に支えられ、大銀杏が横たわっていたあたりは、現在逆木と呼ばれています。

